

國近 英樹（山口大学医学部 第二内科）

【留学先】Division of Cardiology, University of California, San Diego

【テーマ】コントラスト心エコー法による新しい診断法の開発および病態生理の解析

【経過報告書】

私は現在、米国カリフォルニア大学サンディエゴ校 UCSD Medical Center の循環器内科 Cardiac Ultrasound Laboratory に留学しております。同センターはサンディエゴダウンタウンの中心に位置しており、そこでは超音波循環器学(特に心コントラストエコー領域)の重鎮である DeMaria 教授の循環器内科に在籍し、研究及び診療に従事しています。幸い DeMaria 教授のよき理解を得ることができ、動物実験と同時に米国での臨床現場での研究機会にも恵まれ、心筋虚血・再灌流治療と心筋コントラストエコーとの関係を中心とした研究の日々を送っております。お陰様で、AHA や米国心エコー学会等で成果を発表することができています。しかし今のアメリカは全くの平和国家ではなく、ブッシュ大統領の言葉を借りれば“テロに対する戦時下”なので、私の毎朝起きてからの一番の仕事は、CNN ニュースをみてまずテロがおきていないかを確認する事です。そのような緊張感の中、アメリカの医学界での共存・競争を自分なりの視点で学んでいます。最後になりましたが、日本心エコー学会からの留学助成や皆様からの応援に心より感謝し、UCSD メディカルセンターでの研究が、一人でも多くの患者さんに役立つよう頑張りたいと思います。(平成 14 年 10 月 記)

【帰国報告書】

このたび、University of California, San Diego, UCSD Medical Center, Division of Cardiology (カリフォルニア大学サンディエゴ校循環器内科)から帰任するにあたり、米国留学についてご報告いたします。

同循環器内科主任教授 Dr. DeMaria は心エコー領域では世界的に有名な指導者であり、彼からは米国での研究を通じて一貫した哲学を学ぶことができました。ある分野でリーダーシップをとり続けている先立者を間近にし、同じ研究時間を共有できる喜びを感じることができたのも、今回の留学で得た大きな事柄でした。また英語という言葉の障壁が我々日本人にはあっても、学問だけは世界共通でボーダーレスということを日々実感する毎日であったように思います。研究結果については、2002、2003、2004年と連続して AHA にて発表する機会が得られ、また論文も留学滞在中に Journal of the American College of Cardiology (JACC)に2報掲載することができました。具体的な研究内容としては、コントラスト心エコーを用いて、急性心筋梗塞後におこる no-reflow 現象を心筋微小循環レベルで画像解析し、新しい梗塞心筋描出方法と再灌流障害の程度との関係や、GP IIb/IIIa inhibitor 薬が心筋梗塞領域の冠微小循環に及ぼす影響を明らかにすることができました。

AHA2002 は、Windy City と称されるシカゴで小雪が舞い散る中開催されました。テロ直後に開催された AHA2001 (アナハイム) では日本人参加者をみることはほとんどありませんでしたが、会場であった McCormic Place は極めて広いにもかかわらず多くの日本人参加者を見ることができ、世界情勢が徐々に安定してきたことが影響したのだと安心したことを憶えています。そして会場では素晴らしい講演をされている高名なドクターを間近にできる喜びを味わうことができた学会でした。

2001 年に起きた 9/11 テロ事件以降、諸外国から来る研究者にも厳しい監視の目が向けられるようになりました。米国滞在中は留学プログラムに則って、米国研究ビザ、滞在許可書類を大学との契約更新にあわせて、その都度面倒な書類申請をしなくてはいけませんでした。そして肝心である UCSD メディカルセンターでの研究をするにあっても膨大な書類 (研究内容の所有権など) に目を通してサインをしなければならず、赴任直後から日本では考えられないような作業の連続となりました。さらに我々諸外国からの研究者を取り巻いている大きな問題としてビザ (米国入国許可証) があげられます。当時はビザ更新のためにはいったんまず米国外に出国して、海外のアメリカ大使館で申請手続きを行わなければなりませんでした。(テロ以降の2年間は数ヶ月毎にビザや滞在諸手続きの方法が変更になり、常にそういった情報に目を向けなければならないストレスにさらされていました。) ビザ更新のため多くの日本人留学者は日本へ一時帰国しているようですが、テロ事件以降日本でのビザ交付は2週間から一ヶ月以上待つような状態になっていました。しかしそのために大事な研究時間を削るわけにはいかず、メキシコ国境まで20分というサンディエゴの土地柄を活かし、私達はメキシコのアメリカ領事館に行って一日でビザ更新を行いました。しかしこれが結構大変で、領事館の周りでさえも一切英語が通じません。(もちろんスペイン語ですが、全くといっていいほど英語を誰も使いません。) さらに領事館で、もし万が一書類に不備や問題があった場合は米国への再入国ができず、日本へ送還されて更新の手続きが最初からやり直しになるといった具合です。実際再入国できず日本へ帰国させられてしまった方もおられるようでした。諸外国から訪米している者に同時テロが与えた影響は他にも計り知れなく、病院の中だろうが米国内にいる限り ID (身分証明) を常に携帯する環境で、生活を送ることを余儀なくされているような状態でした。

多民族を抱え込む米国において私なりに留学を通して感じ取ったものは、医師はあくまでも医学を追求する科学者であり、論理的知識背景に基づいて治療方法を選択し、患者に還元するという大きな使命の中に立たされているということでした。そして医師全員が研究できる環境が普通にあるという、研究に対する懐の広さでした。しかし現在米国経済も失速してきている中、アメリカの傲慢さ、無駄の多いところなども、多くの欠点として随分と見えてきたというのも事実です。日本においても我々医師全員には本来純粋に学問を迫及する環境が必要であり、それを整え支えていくことの重要性をこの留学を通じて改めて認識するようになりました。

最後になりましたが日本心エコー図学会からの留学助成に感謝し、UCSD メディカルセンターで培った経験が、一人でも多くの患者さんに役立つよう、また心エコー図学会の発展に活かせるように今後も引き続き努力していきたいと思ひます。